

無連結を査定する可能性

—原子価査定テスト (VAT) から見たマイナス原子価—

Med Hafsi*

Assessing unconnectedness: Minus valency seen through
the Valency Assessment Test (VAT)

要 約

本稿は、筆者によって開発された「原子価査定テスト (VAT=Valency Assessment Test)」に関するものである。その元々の目的は、「原子価」、即ち「対象との一定の安定した形 (類型) による結合と関係を可能にする個人の心的 (無意識的) 準備状態の類型を査定することである。しかし、長年VATを用いてきた結果、VATには他の可能性があるということが分かった。それは、VATを用いて、筆者の言う病理的、あるいは「マイナス原子価」構造を査定することである。従って、本稿では、マイナス原子価構造を反映する査定基準や査定指標を詳細に記述し、マイナス原子価という概念の実証性に注目を向けると共に、臨床道具としてのVATの更なる可能性を検討している。

キーワード：原子価論、マイナス原子価、原子価査定テスト、Bion

はじめに

「原子価査定テスト (VAT=Valency Assessment Test)」は、筆者 (Hafsi, 1997, 2007) が Stock ら (1958) の Reaction to Group Situation Test に基づき、開発された文章完成法的な投影テストである。文字通り、VATは、個人の「原子価」構造を査定するための検査である。原子価とは、Wilfred Bion (1961) が化学から借用し、個人と集団における無意識的心的活動、との結合を明らかにするために用いた概念である。Bionによれば、原子価とは、「基底的理想を創り出したり、行動化したりするためにグループと連合していくことに関する準備状態」(p.116; 筆者訳) である。

このような原子価によるグループ・メンバーの結合は、精神的とは呼べず、意図的な行動よりも植物の向性に類似した人間行動によって特徴付けられる水準」(p. 116、著者訳)、あるいは精神的なレベルではなく、原始精神的 (protomental) 水準において成立するのであるとBionは述べている。従って、「原子価は、個人がグループの幻想的活動、あるいは基底的理想グループある

平成21年9月18日受理 *社会学研究科社会学専攻教授

いは基底的思想... に積極的に参加したり、寄与したりすることが出来るための... 自発的、衝動的な要素であり、... 人間の行動における本質的な要素である (Hafsi, 2003; p.37)。そういう意味で、原子価は「人のパーソナリティにおける群れの特性の自発的かつ無意識的な機能」(p. 136、著者訳)であるとBionは結論を下している。

筆者は、以上の原子価の概念を採用し、さらに展開させ、新たな理論、即ち「原子価論」を提唱した (Hafsi, 2006a, 2008, 2009)。原子価論の観点から言えば、原子価とは、(外部的、内部的)対象との一定の安定した形(類型)による繋がりと関係を可能にする個人的な心的(無意識的)準備状態である。ここで言う「対象」は、精神分析における対象と同様であり、外部の人間だけではなく、個人内部におけるこれらの人物の体験と表象をも含む。言うまでもなく、対象は、必ずしも生きた者に限るのではない。先祖、歴史上の人物、想像上の人物、無生物等のあらゆる物や活動(例えば、仕事)も対象の役割を果たす場合もある。従って、原子価は、人の対人関係やグループ、社会との結合だけではなく、人の欲求、要求、好み及び、物理的環境と、それに含まれる様々な活動等の要素との関わり方と、それに対する認知や態度にも反映されるのである。

更に、原子価の表現方法は、個人によって異なる。原子価は知性的、感情的、行動的に表現されるのである。従って、人の違いは、原子価の「類型」だけではなく、原子価の表現方法にもある (Hafsi, 1997; 2006a)。即ち、2人は同一の原子価類型を持っていても、それを表す際に異なってくることがある。例えば、一方は原子価を感情的に表現することに対して、他方はそれを知性的、または行動的に表現する場合がある。

既に述べているように (Hafsi, 1997; 2006a; 2009)、原子価論は、類型論でもある。即ち、原子価には、「依存の原子価 (dependency valency)」、「闘争の原子価 (fight valency)」、「逃避の原子価 (flight valency)」と「つがいの原子価 (pairing valency)」という4つの類型がある。原子価論によれば、正常な人は基本的に、「多原子価性 (polyvalency)」によって特徴付けられる (Hafsi, 2006a)。即ち、正常で、安定した人間関係を築き、自分の社会的環境に適用できる人は、少なくとも2つ以上の原子価からなる「原子価の構造 (valency constitution)」を持っているということである。更に、正常な原子価構造は一つの「活動的原子価 (active valency)、以下、ACV」と幾つかの「補助的原子価 (auxiliary valency)、以下AXV」を含む (Hafsi, 1997; 2006a)。ACVとは、人が他者との相互作用において、または他者に対し反応する際に最も頻繁にかつ瞬間的に示される原子価の類型、言わば、主体の一種の「心的顔」に相当するものである。一方、AXVは、ACV以外の原子価であり、人がACVによって対象と結合(絆)することが出来ない時に補助的に示される原子価である。

VATは、上述の原子価類型を査定するために作成されたものである。従って、長い間、VATを健全な原子価構造や、原子価の類型を決定するために用いてきた。しかし、長年VATを用いてきた結果、VATには他の可能性があることが示された。即ち、VATは、原子価の類型 (2006b, 2009)だけではなく、原子価論における病理的、あるいは「マイナス原子価」構造の査定のためにも用いることが出来ると分かった。

要約すれば、マイナス原子価には、「過少の原子価 (hypo-valency)」、「過度の原子価 (hyper-valency)」とその3つのマイナス類型 (-DV、-FV、-FIV、-PV)と、「未分化の原子価

〔undifferentiated valency)〕という病理的形態が含まれる。

「過少の原子価」とは、低水準の原子価構造に相当するものである。換言すれば、このような原子価構造を持っている人は、全ての原子価（活動的原子価と補助的原子価）が低度にあるので、他者や現実と安定した絆を築くことが出来ない。

「過度の原子価」とは、強度の原子価構造を意味するものである。即ち、過度の原子価に特徴付けられる対象（クライアント等）は、一つの原子価だけ（依存、闘争、逃避、つがい原子価のいずれか）が強烈に高くなっている。この場合のクライアントには、補助的原子価（AXV）がほとんどないので、あらゆる対人関係の状況にその原子価のみで反応しようとする。その結果、クライアントは安定した対人関係を構築することが出来なくなる。

「未分化の原子価」は、全ての原子価の程度が高く、無差別に対人関係において活かされているので、対象には一定の「活動的原子価（ACV）」がない原子価構造を指し示す概念である。ACVの欠如によって、未分化の原子価の対象は、関係の相手に自分と繋がるための信頼のあるヒントを提供することが出来ないで、安定した対人関係が成立しない。なぜならば、比喩的に言うと、ACVは、人のパーソナリティーとその欲求への扉のようなものであると考えられるからである。

本稿では、VATをマイナス原子価構造の査定のために用いる時の諸基準を詳細に記述し、マイナス原子という概念の実証性に注目を向けると共に、VATの更なる可能性を検討したい。

I. VATにおけるマイナス原子価の指標

これらのマイナス原子価の類型は、VATの結果にどのように現れるのか。VATの結果から見れば、マイナス原子価は、1) 低度の原子価構造 (Low Valency Structure=LVS)、2) 単一の原子価構造 (Single Valency Structure=SVS)、3) 多原子価構造 (Polyvalency Structure=PVS)、4) 低度の協同指標 (Low Cooperation Index=LCI)、5) 固定された反応パターン (Fixated Response Patern=FRP) という要素、または指標に現れる。

1. 低度の原子価構造 (LVS)

以下の表1に示されているVATの結果から分かるように、LVSは、全ての原子価の平均が低く、即ち、5.0以下になっている。なぜならば、VATでは、一定の原子価が高いとして判断されるためには、その原子価の平均が5.0以上でなければならない。換言すれば、LVSは、対象が他者と満足に繋がるための手段が一つもないということの意味するものであり、「過少の原子価 (hypovalency)」と、それを有する精神病の患者の特徴であると考えられる。

表1. 「低度の原子価構造の一例」

VAT集計表

日付: 年 月 日 氏名 ()

項目	否定的反応				肯定的反応			
	明白な奮動 ① (-EBR)	曖昧な奮動 ② (-IBR)	感情的反応 ③ (-EMR)	知性的反応 ④ (-IDR)	知性的反応 ⑤ (IDR)	感情的反応 ⑥ (EMR)	曖昧な奮動 ⑦ (IBR)	明白な奮動 ⑧ (EBR)
依	7	○						
存	12		○					
(D)	19	○						
平均	23	○						
1.2	25	○						
合計	4	1						
闘	4		○					
争	6		○					
(F)	11		○					
平均	18		○					
2.2	22			○				
合計		4	1					
つ	3		○					
が	5		○					
(P)	10		○					
平均	15		○					
2	17		○					
合計		5						
逃	1	○						
避	8	○						
(FO)	13	○						
平均	20		○					
1.4	24		○					
合計	3	2						
協	2		○					
同	9		○					
推	14		○					
(C)	16		○					
平均	16		○					
2	21		○					
合計		5						
総合計	7	17	1					
合計%	-EBR % = 28%	-IBR % = 66%	-EMR % = 4%	-IDR % = 0%	IDR % = 0%	EMR % = 0%	IBR % = 0%	EBR % = 0%
原子価 構造	活動原子価 ACV:	補助原子価① AXV ①:	補助原子価② AXV ②:	補助原子価③ AXV ③:				

©1997 Med Hsfui 奈良大学社会学部
〒831-8502 奈良市山崎町1500 TEL:0742-41-9993

表1に示されているように、依存の原子価、闘争の原子価、つがいの原子価、逃避の原子価の低度によって、クライアント（女性）は、基本的な絆を構築し、精神的かつ社会的に存続していくための不可欠な手段を失っている。実際に、セラピストに出会う前にクライアントは、殆どの人（ゼミの担当教員を含めて）と交流や接触をせずに、大学における学生生活を過ごしていた。しかし、途中、セラピストとの治療的出会いによって、クライアントは、最低限の依存の原子価を取得し、精神病とその特徴である連結の欠如の世界に完全に沈むことがなかった。

2. 単一の原子価構造 (SVS)

単一の原子価構造過は、対象には一つの強烈な原子価しかないことを意味するものであり、「過度の原子価 (hyper-valency)」の特徴である。対象は、強度の依存、闘争、つがい、逃避のいずれ

れかの原子価を示して、相手の希望と関係なく、一方的に対人関係を築こうとする。従って、あらゆるマイナス原子価の類型の場合と同様に、このような一方的な繋がり方は関係の崩壊をもたらすことになる。

表 2. 「単一の原子価構造の一例」

VAT集計表

日付: 年 月 日 氏名 ()

項目	否 定 的 反 応				肯 定 的 反 応			
	明白な言動① (-EBR)	曖昧な言動② (-IBR)	感情的反応③ (-EMR)	知性的反応④ (-IDR)	知性的反応⑤ (IDR)	感情的反応⑥ (EMR)	曖昧な言動⑦ (IBR)	明白な言動⑧ (EBR)
依	○							
存		○						
(D)	○							
平均	○							
1.2	○							
合計	4	1						
闘						○		
争						○		
(F)						○		
平均							○	
6.2						○		
合計						4	1	
つ		○						
が		○						
い		○						
(P)		○						
平均		○						
2		○						
合計		5						
逃	○							
避	○							
(FI)	○							
平均		○						
1.4		○						
合計	3	2						
協		○						
同		○						
指		○						
標		○						
(GI)		○						
平均		○						
2		○						
合計		5						
総合計	7	13					1	
合計%	-EBR % = 28%	-IBR % = 52%	-EMR % = 0%	-IDR % = 0%	IDR % = 0%	EMR % = 18%	IBR % = 4%	EBR % = 0%
原子価 構造	活動原子価 ACV: ①	補助原子価① AXV ①: ②	補助原子価② AXV ②: ③	補助原子価③ AXV ③: ④				

©1997 Med Hafsi 慶応大学社会学部
〒631-8502 奈良市山崎町1500 電話:0742-41-8043

更に、単一の原子価構造には、強度の原子価の類型によって、マイナス依存の原子価 (-DV)、マイナス闘争の原子価 (-FV)、マイナスつがいの原子価 (-PV)、マイナス逃避の原子価 (-FIV) が含まれる。上述の表に示されているのは、-FVを持ったあるクライアントの例である。クライアントは、条件、状況、相手を問わず、強烈な闘争の原子価による繋がりを試みたり、相手から要求したりしながら、失敗を繰り返し、長年の間、孤独を体験し続けていた。

既述しているように、このようなマイナス原子価構造は、人格障害と深く関連していると考えられる。例えば、第10章に述べられているように、-DVは、依存性人格障害と、-FVは、妄想

性人格障害と、-PVは、演技性人格障害と、-FIVは境界性人格障害等と強く関連している。

3. 多原子価構造 (PVS)

多原子価構造は、未分化の原子価の特徴であり、対象は全ての原子価が高くなっている状態に相当する原子価構造である。この場合は、対象は、全ての原子価を示すことが出来るので、特定のACVを持たない。従って、クライアントは、一方的に相手に対してあらゆる原子価類型を表し、働きかけることが出来る。しかし、相手に対して働きかけることと、相手と繋がり、安定した絆を築くこととは異なることである。

表3. 「多原子価構造の一例」挿入

(一般用)

VAT集計表

日付: 年 月 日 氏名 ()

項目	否定的反応				肯定的反応			
	明白な言動 ① (-EBR)	曖昧な言動 ② (-IBR)	感情的反応 ③ (-EMR)	知性的反応 ④ (-IDR)	知性的反応 ⑤ (IDR)	感情的反応 ⑥ (EMR)	曖昧な言動 ⑦ (IBR)	明白な言動 ⑧ (EBR)
依	7					○		
存	12					○		
(D)	19					○		
平均	23					○		
6	25					○		
合計						5		
闘	4					○		
争	6					○		
(F)	11					○		
平均	18					○	○	
6.2	22					○		
合計						4	1	
つ	3					○		
が	5					○		
(P)	10						○	
平均	15					○		
6.2	17					○		
合計						4	1	
逃	1						○	
避	8						○	
(FI)	13					○		
平均	20					○		
6.4	24					○		
合計						3	2	
協	2		○					
同	9		○					
指	14		○					
(OD)	16		○					
平均	18		○					
3	21		○					
合計			5					
総合計			5			16	4	
合計%	-EBR % = 0%	-IBR % = 0%	-EMR % = 20%	-IDR % = 0%	IDR % = 12%	EMR % = 64%	IBR % = 16%	EBR % = 0%
原子価 構造	活動原子価 ACV:	補助原子価① AXV ①:	補助原子価② AXV ②:	補助原子価③ AXV ③:				

©1997 Med Hafu 奈良大学社会学部
〒631-8502 奈良市山崎町1500 電話: 0742-41-9063

ACVの機能の一つは、相手の注意を引いたり、相手に刺激を与えたり、自己の一定の原子価によって「繋がりたい」願望を意識・無意識的に伝えることである。従って、活動原子価の欠如に

よって、相手はその願望を感知したり、それに刺激されたり、それに対して適切に反応したりすることが出来ない。換言すれば、このようなマイナス原子価を持つ人は、多くの道具を持っているがそれらを使いこなせない人のようである。未分化の原子価は、使いこなせない道具のように役に立たないだけでなく、本人の対人関係の構築過程をも妨げる。

上述の表は、VATの結果から見た未分化の原子価の一例である。集計表に示されているデータは、「友達もなかなか出来ないし、彼女もいない... 女の子と付き合ったことがない... 親との関係が最悪... いくら努力しても同じです... 僕には何が悪いかさっぱり分かりません」と訴える27歳のクライアントのものである。表に示されているように、全ての原子価に関して、高い得点（平均値）が得られている。クライアントは全ての原子価の人と繋がる事が出来るけれども、繋がってくれる相手がいない。それが彼の原子価がもたらしたパラドックス、あるいは悲劇である。

4. 低度の協同指標 (LCI)

協同指標とは、他者と協力し、共同作業に参加したり、それに貢献したりする能力を測定するための指標である。平均値の高い（6.0以上）協同指標は、その能力が高いと言うことを意味する。逆に、低度の協同指標（平均=4.0以下）、あるいはLCIとは、その能力が欠如しているまたは低下しているということを表しているものであり、マイナス原子価における一つの特徴である。即ち、他者と安定した絆を築いていくための手段の欠如、及びLCIによってマイナス原子価を持つ人は、グループと結合し、共同作業に積極的に参加し、貢献することが困難である。多原子価構造の例として上に取り上げている表3の場合も、共同指標の平均（CI=3）から分かるように、このようなLCIが見られている。

5. 固定された反応パターン (FRP)

マイナス原子価のもう一つの特徴としては、固定された反応パターン (FRP) というものがある。FRPとは、対象がVATの項目（刺激）に対して、常に同じ「反応の表現方法」を示す傾向を意味するものである。即ち、対象は、項目に関係なく、常に「情動的反応」のみ、「曖昧な言動」のみ、「知性的反応」のみを示すということである。上述の多原子価構造の例においては、対象が示している反応表現方法の殆どは「情動的反応」である。

FRPは、抑圧の結果である。マイナス原子価の人は、幾つかの反応の表現方法を抑圧することによって、他者との繋がりの可能性を狭める傾向がある。

終わりに

VATは原子価の類型を査定するテストだけではない。本稿は、VATによりマイナス原子価の査定というもう一つの可能性を示すものである。マイナス原子価とは、原子価の病理的形態である。ここでは、VATの結果から見たマイナス原子価を表す諸基準或いは指標について詳細に述べ、VATの更なる可能性を吟味した。本研究では、VATにおける「低度の原子価構造 (LVS)」、

「単一の原子価構造 (SVS)」、「多原子価構造 (PVS)」、「低度の協同指標 (LCI)」、「固定された反応パターン (FRP)」は、マイナス原子価を指し示す指標として用いることを示唆している。しかし、ここで最後に強調したいのは、これらの指標や基準が絶対的ではないということである。勿論、これはマイナス原子価に限ってということではなく、VATによる査定の結果全体に対して言えることである。VATだけで、対象の原子価構造を決定することは、不十分な場合もある。従って、クライアント・セラピストの治療的関係の場合は、クライアントの原子価構造に関する結論を下す前に、VATによって得られた結果を、臨床的にも検証していかなければならない。換言すれば、セラピストは、治療的関係を通じて見られる臨床的事象（例えば、マイナス原子価による転移、逆転移など）の分析によって、VATの結果から読みとられるクライアントの原子価構造や類型が反映されているかどうかを確認する必要があると考えられる。

文 献

- Bion, W. (1961). *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books.
- Hafsi, M. (1997). Valency and its measurement: Validating a Japanese version of the reaction to group situation test (RGST). *Psychologia*, 40, 152-162.
- Hafsi, M. (2000). 治療関係における「投影同一化」への対応について. *プシコフィリア研究*, 1, 4-17.
- Hafsi, M. (2003). *ピオンへの道標*. ナカニシヤ出版.
- Hafsi, M. (2004). 「愚かさ」の精神分析. ナカニシヤ出版.
- Hafsi, M. (2009). 「絆」の精神分析. ナカニシヤ出版 (in press).
- Hafsi, M. (2006a). The chemistry of interpersonal attraction: Develooping further Bion's concept of "valency". *Memoirs of Nara University*, 34, 87-112.
- Hafsi, M. (2006b). 対象関係の病理学を理解する頂点としての「マイナス原子価」～ある マイナス依存原子価を持った男性の事例. *プシコフィリア研究*, 3, 3-15.
- Hafsi, M. (2007). When "sex" is the sole interpersonal bonding means: A case of a woman with a minus pairing valency. *Memoirs of Nara University*, 35, 121-133.
- Hafsi, M. (2008). The myth of Oedipus from another psychoanalytic vertex: The "invisible large group" and its psycho-dynamics. *Bulletin of the Research Institute of Nara University*, 13, 23-41.
- Hafsi, M. (2010). 「絆」の精神分析. ナカニシヤ出版 (in press).
- Stock, D., & Thelen, H. (1958). *Emotional dynamics and group culture*. Washington, DC: National Training Laboratories.